

皇朝儂名史畧

五上

御封書	室	特31
		850
六冊	八號	五架
		八國

後秦良帝	至	後陽成帝
五上		

五上

皇朝儂名史畧

靜岡 邨松良肅編述

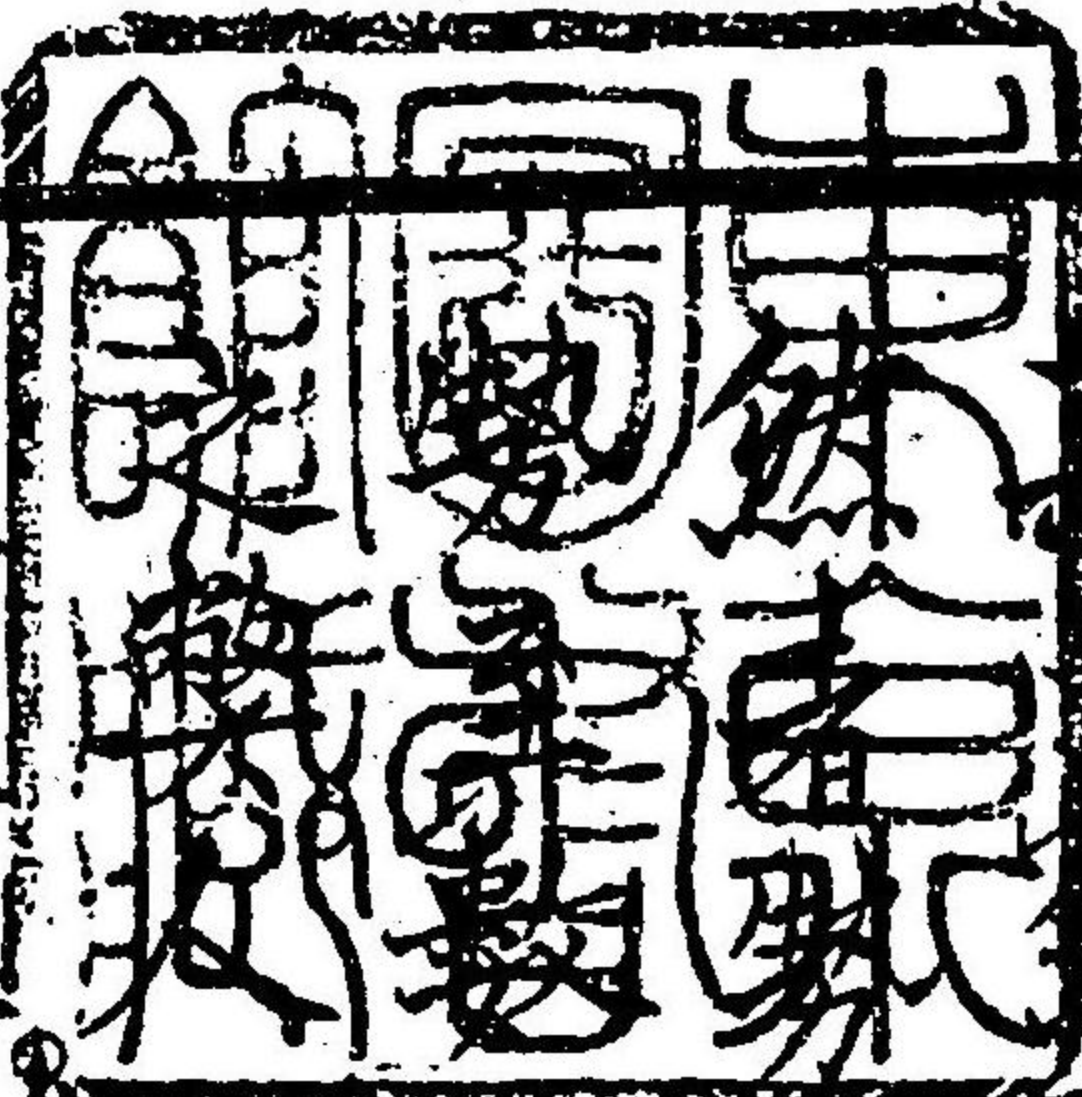
白王朝假名史略 下編

明治七年十一月文林堂 茂

緒言

其當然而然者數也。不期其然而不得不
然者勢也。其未然而將然者機也。機之與
勢。至數之漸也。夫造次之變。人所忽。染習
之弊。人所易。其成敗。雖以一日不可見。漸
浸之久。至於不可已之勢。盛衰之數。遂定
矣。蓋自古治亂興亡之數。非一朝一夕故
常萌乎機。勢之所動。而成乎大權之所移。

緒言



其當然而然者數也。不期其然而不得不
 然者機也。其未然而將然者機也。機之與
 漸也。夫造次之變。人所忽。染習
 所易。其成敗雖以一日不可見。漸
 浸之久。至於不可已之勢。盛衰之數遂定
 矣。蓋自古治亂興亡之數。非一朝一夕故
 常萌乎機勢之所動。而成乎大權之所移。

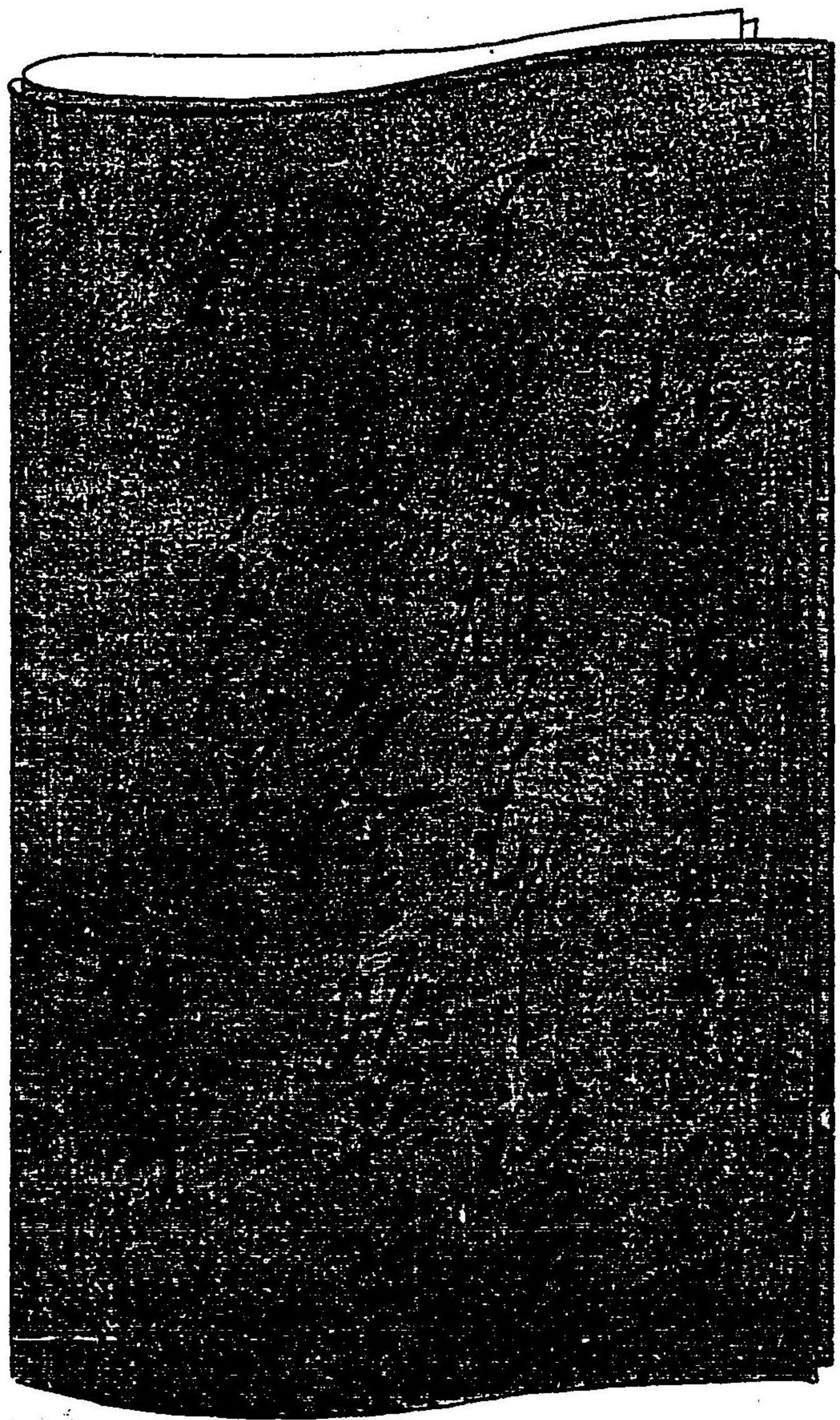
者也。夫吾邦上古王政之盛。措不論。及有承平天慶之變也。機勢之所乘。胚胎於平源迭興之勢。文治建久之時。大權移歸武將之門。天子擁虛位耳。有元弘建武之變也。釀於南北分爭之勢。而應仁文明之際。大權遂墜於管領手。天子將軍徒擁虛器耳。降至元龜天正之際。亂離之極。群雄割據。侵伐吞噬。天下不復知大權之所

在。天子將軍果何有乎。由是觀之。天下每有變世運。不加其盛。而加其衰者多矣。慶長元和之際。豪傑輩出。雖一舉其大權。未能推焉以歸之於朝廷。及有嘉永癸丑之變也。終致於今日鼎革之勢。維新王政。收於千歲不可拔之大權。文明之化。郁乎溢四海。實可謂金聲玉振之美也。嗚呼。自今視古。其治亂興亡之機。猶

就覆其筭其成敗。而後之視今。亦猶今之視古也。夫若是則邦之大權。由機勢之所向。以易其地位者乎。機勢之相逼。可不懼哉。

明治七年甲戌九月

晚邨 昭肅識



就覆其筭其成敗。而後之視今。亦猶今之視古也。夫若是則邦之木權。由機勢之所向。以易其地位者乎。機勢之相逼。可不懼哉。

明治七年甲戌九月

晚邨、相肅識



楠正成卿之像



豊臣秀吉公之像





○大永七年、初め細川高國

後奈良天皇御諱ハ
 御紀第一の
 九月五日
 藤原相家公近
 関白た

白皇朝假名史略

卷之五上

後大永七年二月廿日
後大永七年二月廿日

大永七年二月廿日

三好元長
一本は長基

皇明假名史略卷之五上

席捲靖海日韓虜
 屢避鋒惜君帷幄
 下送恨畜真龍
 豐公贊
 松陵 閣

卷之五上

席捲靖海日韓虜
屢避鋒惜君帷帳
下送恨高真龍

豐公贊

松陵 西陵

後醍醐天皇
御幸八
第一の
九月五日

藤原相家公
開白た

○大永七年、初め細川高國



皇朝假名史略

卷之五上

後大永長帝の時

大永七年二月廿日

三好元長
一本は長
基も河利

皇明假名史略卷之五上

讒言を信じて、其臣香西光重、衛門左衛門を殺し、京都驛にかりて三好元長を筑前小郡に誘ひ、阿波に在りて之を聞きし、其時節ありや、細川澄元の子應明五郎、右京大夫を奉り、兵を阿波に起して京都に攻入りたり、細川高國、武藏守、援兵を近江若狹越前等の諸將に請まり、朝倉孝景、五門来りて高國を助け、元長と桂川に戦ひ、元長三軍を作り、上軍下軍とて

削髮して海
雲の上
助幸つ阿波に
都を攻りて後領
細川高國を桂
川に戦ひ、元長を戦

川を渡りて進み、元長は高國の陣、左右を顧みて、奮い、多と元長中軍を以て、高國の陣を衝かれ、高國大敗して走りけり、元長勝り、乘りて之を追ひ、部伍の足多、頗る乱き、所を朝倉孝景、横鎧を入り、撃つ、ゆゑ元長遂に敗きて阿波に逃歸れり

○享祿元年秋九月、三好元長使を朝倉に遣ふ、孝景とよく交りて結び、丹波香西氏等と約し、又高國を攻

んとせり高國之を開て大
一僕を出奔して北畠伊六
前江朝倉前尼子雲氏等に
熱りて助けを請ふこと
これを禮せされ終に備前
に往く浦上村宗助掃部
依まり又將軍義晴八杉木
に奔りて佐々木植綱民部
に依られり此頃浦上村
宗々其者赤松義村を殺し
朝倉氏の例よあり大名の
列に加えらんと思ひり
あるゆゑ高國とよ交り
力を盡して援けり

○三年北條氏綱左京上
杉朝興を河越よ攻て之を
敗せり氏綱も北條長氏
早雲の子あり初め早雲
去ぬる延徳三年の頃今
川氏の援兵を借り九そ
五百人ほどあり夜黄瀬川
を濟り曉き不意に堀越
氏は逼り火を縦ちて攻め
茶々を誅し厘々三十日あり
て伊豆の國を畧し韭山城
小居りて兵力を養ひ後
又小田原城を襲ひ取り倉
兩上杉を討んと圖まら其子

遂に敗走し阿波
に少くも歸りける。明
禮の年、祿元年に
元主の命を奉り
て朝急者素我と記

味方附て
再び西川を
越えられぬ高國
遂に備前を
浦上村宗
依りける。

氏綱も亦よく兵を用ひ早
雲の遺志を継ぎ去る大
永四年小上杉氏の江戸城
を攻落し是歳河越城
を陥しこれを氏綱の威名
大いに遠近に振つり

○四年夏六月細川高國浦
上村宗の兵を以て摂津小
攻入り、細川晴元を撃つり、
三好元長も細川晴元を相
けて之を尼崎に拒み、一
時軍利ありされども高
國が界府を攻めると元長
これを天王寺に逆へ戦ふ

又將軍義晴に於
て出て朽木を奪に
依り木植綱も依り
け孝同しき四孝の
以てよき村宗

遂に大ひひ之を擊敗り、
村宗を討死し、高國尼崎
の民家を走り、漆戸の壺の中
に跳り入りて其身を匿せし
三好の兵卒追來りて遂に
之を殺せり

○天文元年三好元長、柳本
彈正の子某を怨むることあり、
之を殺せし、小細川
晴元これを聞き大ひ小怒り
けきを、元長髪を削り、海
雲と名を改め、其罪を謝
り、かつ小晴元意を解け
かりけり、又三好宗三稱を

とらふとせり。兵を
率ゐる攝津に出
て晴元を改めし
三好元長も晴元を
助むる人数を採出

元長の元より元長乃
傳權を嫉みけきなき
元長を晴元と誹り
ゆゑ晴元乃三好宗三
長政亮をてこれと
圖らしめ本願寺の僧徒
を誘ひ遂は海雲を大坂



○元長乃の側を
天王寺の側を
元長乃大に戦ふ
遂に高木村宗
宗乃阿波に
討まけ祭る

顯本寺小園に海雲
其妻並其子長慶を
して阿波に逃を歸ら
已れて自殺しはひ

○二年本願寺の僧徒ど
も又細川晴元を怨む事
ありて却て界の城を攻
けきを晴元遂は淡路に
出奔せり木澤長政を京
都の法華の僧徒と
又界を攻て之を取せり
此時晴元も亦阿波の兵
を率めて長政に力を添へ

細川晴元と三好宗
三子の終言哉
木澤長政と門徒の
僧徒をたはせ
あをれと好元長

一、本願寺の僧徒、大坂
 小坂を築き固く守りたる
 中、晴元之を攻むれば、
 遂に抜くことを得ず、因て
 後共み和睦し、兵を弭
 め、晴元も京都よみ、將軍
 義晴を朽木より迎へ、
 自ら管領とありたり、此
 頃畿甸まじく乱きて、將軍
 も管領も、まゝ其跡を行れ
 る、只其名なかりあり、
 小願位を擁せしものあり
 ○七年夏五月、甲斐の武田
 晴信、後別業して、其父信元
 信玄といふ

を界小坂免く殺せ
 ば元吉の子の長
 慶と阿波北國と
 逃れり、さて本願
 寺の僧徒等、い事

を駿河に追ひ、自ら其國を
 篡り、武田氏と源義光の
 後裔あり、義光の子、義清、武
 田冠者と稱し、伯父義家の
 旗及び無楯の甲を其家よ
 傳へ、世々甲斐に居まり、義
 清の後二十餘世、ふして信
 虎に至り、駿河の豪族、久嶋
 某と戦ふ、之に勝ける日、
 會く男子を生み、けを、其
 名を勝千代と呼び、後長とて
 大膳大夫晴信と稱せり、沉
 澁、ふして權變多き、更將、か
 り、信虎の少子信繁を寵愛

能はし、より怨哉
 以て、晴元
 を、晴元
 ち、力なき、淡路の
 國へ、奔りけり、長政

して常は晴信を廢せんと
 したるを晴信も故は癡騷
 の状をあり自ら其才を
 曉まをり去る天文五年の
 十一月は信虎兵を信濃み
 出し海口の城を攻めふ城
 主平賀源心より拒ぎ戦ひ
 一由急城を落さること能わ
 ざりしに會く大雪ありけ
 るに信虎諸將と議りて遂
 に兵を班さんとせしむる
 晴信 父信虎は請ひ兵三
 百を以て自ら殿をあり五
 六里後れ陣をたゝたり

晴信元を奉じ
 都の以禮母を以て法
 華の僧徒をわたり
 元の本願寺に成り
 圍を吐き入り來り候

其夜晴信兵士を警めて入
 り甲を執り馬を鞍を卸さ
 しめ兵士を急を吐て
 り風雪是の如くあるに
 用心しけるまゝいと車法の
 ことなるありあはれやき
 ふもや五更の頃よ及びて
 晴信の兵を進めく還つて
 海口は向よりゆ雪を肩
 て疾く馳せ曉ごろよ已み
 城に抵りし敵は是風雪
 を憚んで各油断しける
 處を急推奇攻られ城
 兵も不意を撃れしことゆ

路より來りまゝに
 攻けまゝに僧徒を
 守りしに
 はてしなくあはれを
 互不和して兵を弭め

皇朝信長史略卷之五

小還きりしに晴信ハ已
 甲斐自立せり武田家
 の諸将等も兼て晴信の武
 器を服せし事ゆゑに首
 を頼りて其命を聴きたり
 隣國にては斯る内乱あり
 しを聞き其隙に乗んと欲
 し信濃の士民等多くも村
 上義清に服従せり
 ○秋七月北條氏康子あり
 上杉朝定上杉憲政等と戦
 ふ大い之を敗せり初め
 上杉朝定既し勢ひ衰へ上
 杉憲政の獨り東北に威

等将す。其の強
 し。其時小舟の兵を
 書を。其の勢。其の
 其の黨を植て。近
 國近郷。其の掠。其の

を振り其頃今川義元武
 田信虎も皆憲政の好
 んを通ぜしを憲政心驕
 り游宴の耽りて武事
 を顧みず殊に北條を小
 家ありと侮り。更し意を
 加へざりし。小老臣長尾景
 春入道意玄ひとり之を患
 ひ屢く諫めし上杉朝定と
 和睦せしめ専ら武備を講
 ぜし。小憲政も其の變臣菅
 野信方上原兵庫等の説
 を信じて。意を疎んじ。游
 嬉する。初め如く。小あり。小

おき。武家。其の劣
 其の。其の。其の
 一揆。其の。其の
 其の。其の。其の
 其の。其の。其の
 其の。其の。其の

つり此頃氏康も兩上杉の
連合し北條氏を攻んと
するよりをきき諸將を召
て曰く河越の實に兩上杉
の衝地あり宜しく一勇將
を撰んで之を守らざんを
ある處うらむとて北條綱
成左エ門を以て之を守ら
しめたり綱成も常小黄色
ある旗は八幡の二字を書
して号とる一戦ふとて小
連りみ勝利勝りと呼び奮
闘しつらや多時の人黄八
幡とて皆之を畏れつらと

既ふし兩上杉は古河の
晴氏に説て出馬を請ひ其
兵元を八万騎河越城を圍
みたり氏康は河越を援け
んとて兵を出し人間河の
南に至り上杉の兵を見て
遽しく戦をむく逃る事
兩度及びび一を上杉の
兵士等ハ果して北條氏を
怯ありと侮りつらを氏康
より之を諜り知りて或夜
兵を進めて直ち上杉の
軍を衝撃しければ上杉の
軍大は擾れしを急ぎ奮戦

危窮を凌ぐも至
る。かまし本どもの
少るれが冢に列を
みざれ来て魔界
らふき世のたまも也。

又細川氏綱を
畠山政國と河内攝
津に兵を基奉者。
少程不應中一游
依長教少とに都

三月 又上杉の軍に上

ト

して遂に朝定を虜よりけ
まへ、暗氏憲政等ハ辛じて
逃返れり是は於て関八州
の豪傑氏康は降参せし者
凡そ九十餘姓ありと云此
合戦ハ或書ふや天文十五
年四月二十日の事ありと
もりつる

○冬十月北條氏康里見義
弘兵庫と鴻臺は戦ふ大
み之を敗せり初め氏綱の
威名遠近は振ひ武藏下總
の諸將多くハ北條氏は降
参せしに足利義明工佐

獨り下總の御弓は在りて
御弓御所と稱して氏綱は
抗せり是歳氏康兵を發し
て御弓を攻し里見義弘
安房上總の兵を舉まりて
義明を援けしと十月大に
鴻臺の戦ひ義弘を走らせ
義明を虜し首を斬りて
二千餘級あり或書ふ鴻臺
の戦ひハ北條氏綱ありと
もりつる

○八年夏六月將軍義晴矢
瀬に遷れ尋て坂本よゆき
朽木植綱は寓せり此頃三

城攻るに里見孝晴元
を三好宗三を法之
はしと。階ぐむれ
少克きまを阿波
をらまへ好長慶城。

招きて之を好ま
ふと共におのりて
宗三と隙あらを
佐々木教とひ合
りて之を攻けるゆ

皇明 後 永 隆 五 十 一

好の黨蜂起して乱を起し、京都驛がきゆ多將軍も近江の諸大名に依りて自ら存ぜりあり。

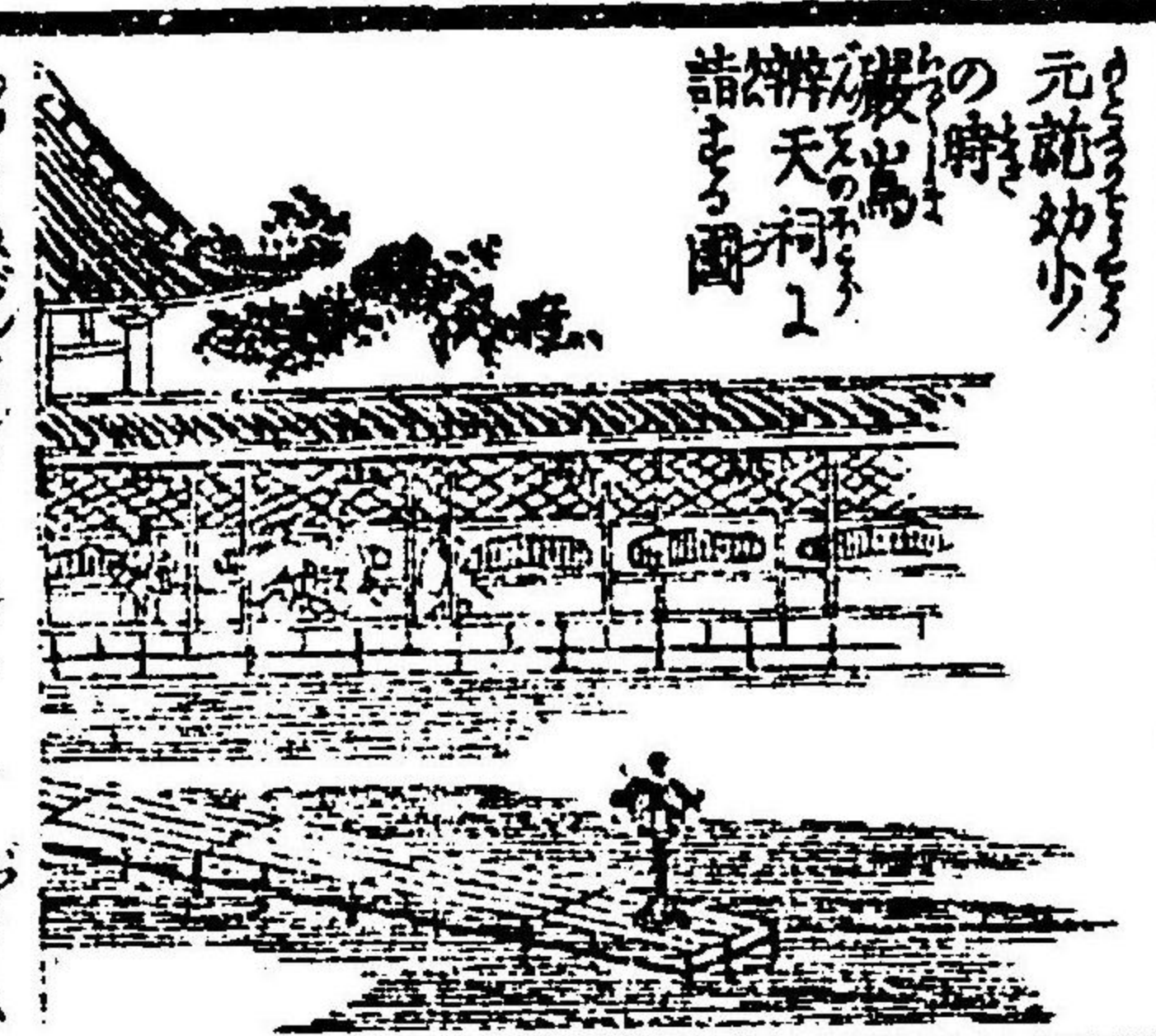
○九年出雲の尼子經久其子晴久と共に毛利元就を攻て却て期續せり。尼子經久の姓の源氏ゆゑ鹽谷高貞五世の孫あり、初め高貞の諱死せしと記、三歳の稚兒あり、一人の尼之を憐みく巳が弟子とふし、替は之を養育せり。兒長くと其恩を感し、遂に尼子氏

と稱し、世々出雲に居たり、毛利氏は大江匡房の裔あり、匡房の曾孫を廣元といふ、源頼朝を佐けて功ありしを以て安藝守となり、因幡守に遷り、正四位大膳大夫に至れり、子五人あり、弟三子と安藝守季光といひ、相摸の毛利莊を采地とふ、因りて氏を毛利と爲せ、季光十世の孫を弘元といふ、弘元の長子を興元といひ、次子を松壽といひ、松壽幼みして器量あり、嘗て

元。字。道。討。義。介。利。は。以。將。年。義。晴。都。の。み。だ。れ。我。避。る。も。再。び。坂。本。の。孫。を。我。子。の。

家。名。は。元。後。の。勢。將。軍。職。を。讓。れ。る。義。輝。と。も。名。宗。ら。せ。今。も。又。及。領。晴。元。と。三。好。長。慶。と。逼。

皇朝偉績集卷之五十一



元就幼少の時
嚴島に詣りて
天祠を詣りて
諸國を祈る

嚴島辨天祠に詣り其從者
小問ふて曰く汝等は何を
祈りと從者の曰く郎君
安藝の國の主とあらん事
を祈りありと松壽曰く
何ぞ吾々天下の主とあら
ん事を祈らざらん今一國の

主とあらんことを祈り其
成所知るべきの事と衆人
これを聞て其志の大あり
服せりとぞ去る永正八年
元服して名を元就と改
たむ此頃大内義興世に
周防の山口に居り尼子經
久と連年攻戦して止まら
けさば安藝石見等の豪族
其間介立し獨り常多
りし毛利氏に獨り經久
は附従へり先ニ子經久
其子興久を殺し孫晴久を
立ち嗣とみせし晴久ハ

長祿をわたりて
を削おろし丹波の
國へ遁れしを
く氏綱を愛敬し
を家輝を迎へ

初不入し是よ
理しを三好氏細
川氏にかはりて威
権を好む事と
無きあり如我能後

て國に歸れり、其後元就も山口に往き義隆に謁しけり。其家人陶晴賢が謀叛の色あるよりを察し、安藝に歸りて其變を規ひけるもど。

○八月駿河の今川義元遠江を畧し、参河に擊入り、尾張の織田信秀、正と小豆坂に戦ふ。遂に敗績せり。織田氏も平重盛より出たり。重盛の次子と次貞盛やりの去る。元暦中、西海に戦死せり。資盛も孤子あり。

り、其母これを懐きて近江の津田の郷に匿まき、その長、其母の美色あるを悦び、其児を併せり。之を養へり。會越前織田莊の祝人來りて、其孤児を請りて養へり。其児長じ、終に織田氏を冒し、親真と稱し、子孫世々祝人と為り。後斯波氏に仕へ、尾張の國に徙まり、親真十五世の孫を敏定と名せし。清洲に居り、敏定の嫡子を信定と名せし。信定の子を信季、後

里威を好む。ゆゑに
ね振舞多るけり。
生は三好政康。康
長と名せし。岩成九
道を二好と名せし。

喚りて世乃人。礼
成於今。今程久
秀を生。三好と名せし。
る。小二條正家
を。圍を好。平家

寺と称せり、其凌唐より
を以て勝幡城に居たり、此
信季ハ殊ニ武を嗜ミ士を
愛シ之れを士民多く之ヲ
帰從せりとぞ。

○十二年細川高國の子氏
綱和泉に入りて乱を起せ
り管領細川晴元三好長慶
を遣ひて撃て之を却け
たり。

○十四年西洋の忽見杜瓦
爾國の商舶大隅海上種嶋
に疎泊し始めて鉄炮を傳
えり、十數年の後よりて

終り天下に備わく行われ

○十五年冬十月將軍義晴
坂本に往き其子義藤元
服を加へ名を義輝と改め
む詔りて征夷大將軍と
あしめり、去る十二年細川



義輝
元服の
圖

輝を弒逆し是利
家世末を立しけ祭。
義輝乃弟家
昭々近江に著狭し
越前よりつ我身

をせし更我
能ひしあされ道
美濃路より出
織田信長依れ
けし我も織田信

氏綱兵を起せし時、畠山政國、游佐長教等、三好氏綱に應じたり。管領晴元乃三好宗三を遣りて、之を撃し、かゝり克されば、又三好長慶を召て之を撃しめたり。將軍義晴、素より管領晴元を惡し、陰に細川氏綱と右けし、之を管領と為んこと、成許せし。晴元之を聞て、乃ち六角定頼と謀り、通じ、義晴を攻んとせし。義晴遂に坂本に遷れ、將軍職を其子義輝に譲れり。

○十六年夏四月、細川晴元、六角定頼と共に、義晴、義輝の保てる所の北白川城を攻められた。義晴城を焼き、東へ走り、坂本に據りけるを、晴元等も坂本を攻め、義晴大に恐れて和を乞ひ、京都へ歸り、晴元を故の如く管領とせしたり。
○十八年初め、三好宗三乃、三好元長を誘殺せし。元長の子長慶、常ふ之を怨み、ける。是歳、長慶、游佐長教

長い。さあ、その父信秀の尾張の小を奪ひ、まう家をも名を興し、武略を勵し、土を愛し、麾下の

猛將多る。中、柴田池田、丹波、佐之、間、殊き。羽、紫、秀、吉、い、智、勇、益、備、の、良、將、と、少、力、を、致、勢

等と連和して遂に宗三が
中嶋の城を攻て之を陥
りて、接しを細川晴元と乞
けき、晴元京を發して江
波城に入り、六角定頼も亦
之を援けたり、其時三好長
慶が曰く吾義榮義維を
將軍とす、氏綱を管領と
あさん、何の患う有んと
て六月長慶其弟十河一存
と遂に江波城を攻て之を
落しけきを、宗三の遂に江
波城に死し、晴元ハ二將軍と

織田家の武名
を白くし天下
を轉くはるる、永禄の三年
五月、足利義元、後河

被さんで又坂本に起りた
り、長慶ハ乃ち京に入り、
其家人松永久秀を留守た
らしめ、自らハ兵を收め、
摂津に帰き、
○十九年二月細川晴元城
を如意嶽に築き、前將軍
義晴を移し居しめんとす
に、義晴會病あり、五月遂
に穴太の山中あり、薨じ
るを、晴元定頼等大將軍義
輝を奉りて、宝泉寺に徙れ
り

能今川義元、織
田信長を撃つ。其後
四軍の有餘の勢を、後
遠冬三別を、尾張の
了尾張の山より入

○十一月三好長慶、摂津より

京入り、火を縱て大津松本に至り、けしきを義隆に檣木を走り、晴元志賀陣せり。晴元の家人等長慶を迎へ撃て、却りて之がため不敗績せり。

○二十年七月、北條氏康上野の平井城を攻く之を隨し、けしき、上杉憲政、遠く越後へ奔り、長尾景虎小休り、其姓氏、職号等を、こゝ景虎小接けり。是、於て景虎上杉氏を削り、関東管領と称せり。上杉氏ハ憲顯より

憲政小至り、十二世元を百八十九年ふして、ひびり。○八月、大内氏の家老、晴賢、其主義隆を殺せり。晴賢初の名ハ隆房、後小削髪して全善と稱せり。世々大内氏の家老、小く威權をとり、事年久し、晴賢屢々義隆の軍事を忌むるを諫め、乃れを義隆常小之を心よりとせむ。此頃相良武任ある者、晴賢と隙ありて、連りふられを義隆小諷せ

○九根就る津の支城を勢をきよく攻させ

義元をいとも勢よく

本陣を捕獲するをす

急ぐと先急を法を

注進よ、竹中懼るる氣

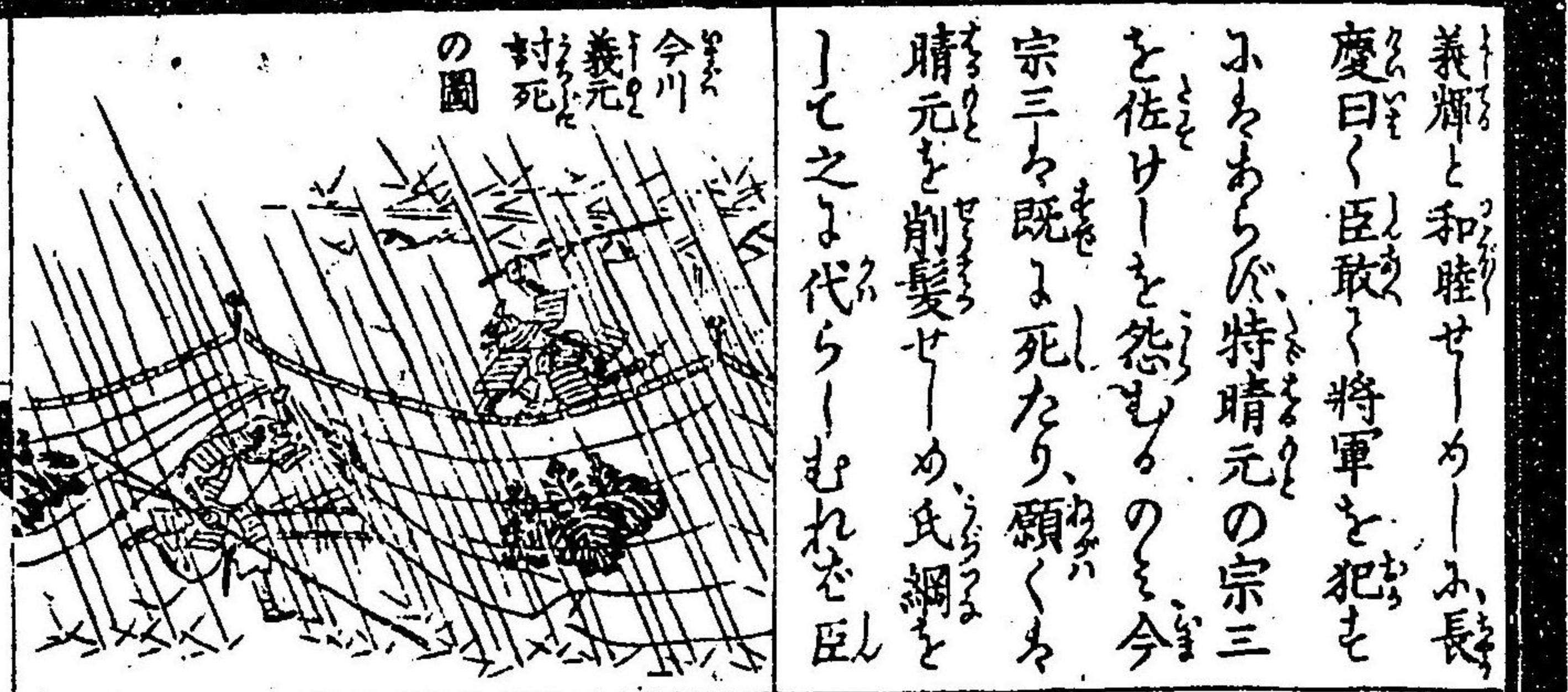
色よく、塵の三子の人数

と、山を循りて少く池

つ、家かえり本陣目録を

突く、五月の半

義隆と和睦せしめ、長
 慶曰く臣敢く將軍を犯さ
 ずと佐けしを怨むるの今
 宗三は既に死たり、願く
 ず晴元を削髮せしめ、氏綱を
 して之より代らむれを臣



〇二十一年六角定頼人を
 して三好長慶ふ説て將軍
 年ふしとてびびり、
 至りて六世凡て百七十八
 弘周防を鎮せしより、是よ
 専しせり、大内氏は初め義
 主とあり、巴れ自ら國政を
 の季第三郎義長と迎へ、
 晴賢の豊後の大友宗麟の
 長門より走りて自殺せり、
 りし、義隆の軍敗れて遠
 謀叛して山口の城を攻め
 疎せしより、晴賢遂に
 義隆を討て、山口の城を攻

陣中も、孔立強を
 服部小平太、毛利秀
 高、道三よりつ、年元
 志、我やと揚げ、
 大將死す、討死、

皇朝通志卷之五十一

十一

請謹んで兵を戒めんと因
て晴元をこりあぐ髪を削
りて丹波に奔りやれを義
輝京都に帰る氏綱を管
領とみせしかど長慶獨り
威を振あぐ京畿の諸政を
とり行つり是は於て三好
氏細川氏に代りて天下の
政權を執る事とみせられ
り其後長慶は家臣松永久
秀に幕府を守護せしめ
巴れを兵を引て河波に歸
れり久秀はもと西岡の賈
人あり才智慧照あるを以

と致す。彼河内勢
のみをこりて散失する。
是よりして信長の
威を四方に振ひらる。
主後齋藤龍興を

てよく長慶は親任せられ
遂に其重臣とあり
○八月三好長慶の弟善賢
實休と其主細川持隆を殺
して阿波の國を慕り建
武年中細川氏四國を領せ
しより是に至りて十一世九
と二百二十餘年ふくむに
びたり
○是齋藤龍興も其君
土岐定朝を弑して美濃の
國を奪り
○二十二年五月武田信玄
小笠原長時と桔梗原に戦

す。其を滅ぼして取
りて美濃に居城を
移せしむ。少くも
軍は於て受あ
る。小笠原の生る

ひ長時遂に敗績一國を棄て走りたれを信玄悉く信濃を取りたり。

○將軍義輝の三好氏の專横ありしを惡む細川晴元を召還して京都に入らしめたり。三好長慶之を聞て大に怒り八月兵二万騎を率ゐて直ちふ京都を攻入るる小義輝晴元と共よ丹波に出奔せしを長慶は追んで丹波を攻め晴元を執へ之を獄に繋げり。義輝は遂に和睦を請ふて

又京都に歸れり。細川朝之先は將軍家の執事とあり子孫其職を襲ひ晴元は子で九世凡そ百七十七年ふしてはびたり。
○弘治元年九月毛利元就陶全善を誅せり。初め大内義隆陶全善は攻らまじふ自殺せんとせしとた書と毛利元就は遺りて吾為よ辭を復せんことを託せり。是ふ至り元就諸將と謀りて曰く彼は兵衆を我の兵寮に宜し城を嚴嶋に築

○ころく頃を永禄十一年。立方の勢を從へず。都に於ては支。好志のあしを。風ふ木そのの靡く。

て潰ゆる志の平八城。た中をく初ふ攻入る。三好義繼松永久。秀を初し。攝津河内。の殘黨も或は逃れ

全妻を引寄せ彼の衆兵
 を一處に圍めまゝ一
 舉ぐ之を盡さば一とて
 諸老臣の諫めを用ひず強
 て嚴島に城を築き後大に
 後悔しけるを流布せ
 させられた全妻果して兵
 三万を率ゐり嚴島を攻
 め元就と兼て謀りてこと
 ゆゑ精兵僅に三千人よ
 一日の兵糧を用意させ晦
 月の夜風雨を借かりし
 直ち舟を駛せ岸に着や
 いかや皆その舟を返し

或を降りて申す意
 をたす利り織田
 氏の力よりて家昭
 征夷將軍に任じ
 後信長の後立位下

必死を覺悟し敵の不意を
 襲ひたれ全妻を狼狽し
 て走り海岸に出づれど舟
 あられを逃る路あり遂
 ち自殺せり元就既ち全妻
 を誅し進んて備中は攻入
 りたれを備前の宇喜田直
 家其威風を聞て遂ち和睦
 を乞ふ是は於ち毛利氏
 の威名遠近に振ひたる
 を元就より四人あり皆軍
 事は精し嫡子を隆元其次
 を吉川元春其次を徳田元
 清其次は小早川隆景あり

叙せしれ今もさる
 李の勢あり利き文
 東國より名も小條氏
 康吉を天文七年
 高上杉と戦ひて扇

皇朝後編 卷之五十一

三十一

○正親町天王 御諱ハ方
仁後奈良帝第二の皇子
天正十四年小位を禪り
後陽成帝の文祿二年正月
五日崩ト五ノ御壽七十
五

○永祿元年九月將軍義輝
細川晴元と勝軍山ノ旗を
建て松永久秀と北白川
戦入り既ヨリ將軍又長
慶と和をかりて京都ニ歸
きりよりて長慶晴元を囚
へて芥川ニ幽せり晴元
年を経て後死せり

○是歳九月木下秀吉初て
織田信長ふ仕へたり秀吉
尾張愛智郡中村一名銀
の人あり父を弥右工門と
り母日輪の懐に入ると
夢みて之を生りとぞ幼名
を日吉とりの八歳ありて
其父失しかる衆人同邑の
筑阿彌ある者を納て継父
と為さむ日吉十六歳の
と紀藤吉郎と稱し遠江國
に往きて松下加兵衛之網
み仕へし或日之網日吉
よ金を與へし桐皮胴の鎧

谷の朝定を遂に
れて失りたり山内憲
政を城後の山に逃け
る長尾景虎を
身を寄つ己氏を

官職を譲りてん
系虎を都上
洛し將軍義輝
謁見し輝の一字を
賜りて上杉輝房と



織田信長あり、汝往て之が
事へよと、是は於藤吉郎
自ら名を木下秀吉と改め、
信長小謁せんともなま
信長他出せし途中、秀
吉路傍小拜伏して家僕と
あし人事を請ふ、信長之を
視て曰く、汝の顔を撫む似
たり、定めて慧うらん且其
統阿弥の子ありと聞て、乃
ち小筑と喚りしとぞ、
○二年五月、長尾景虎京都
入りて、將軍義輝を謁し、
関東の管領とらんことを

名ありて。関東管領
と稱し。理美公の
法將士等とくその
威小懐後。まじり
條氏康と心おるる

はより。有利此武
田晴信を父。信虎を
逐出。甲斐文治を
篡ひ。より。あやも
と天を。経了。こと

請ふ將軍之を允し且諱の一字を賜ひ名を輝虎と改め上杉氏を称せしむ故事より將軍の公子一人を奉り以て関東を鎮めんことを請ふふ之を許さざりて関白藤原の前嗣近衛龍を奉りて歸り以て東國を令せり

○三年正月即位の禮を行ひぬり毛利元就金を献じて其費用を給せんことを請ふより元就を従四位下叙し大膳大夫に任ぜ

られ菊桐の記章を賜り○五月今川義元兵四万騎を率りて遠参を畧し尾張を撃入り九根鷲津の諸城を攻め桶狭間本陣を破るたり織田信長之を聞いて兵三千を率りて疾く山路を馳せ迅雷暴雨を侵して直ち今川の中堅を衝たり時義元の勝ち軍を祝し酒宴を設けて酣飲せる折からあれを陣中大に乱を發ぎたるを服部小平太急に進んで義元を撃け

山本晴りと志願水魚の情婦く其力成盡く上野信濃とより其材上家清を改教を河牛

鳴の四郡ををく我手不入る家清を越後へ居る輝虎小報の軍を報る不頼むしひある上杉輝

うみ義元刀を抜て小平太
が膝を斫れる處を毛利秀
高とくさぐさ進みより鎧を
以て義元を刺し終る其首
を獲り是は於て今川の
兵大に敗走せり

○四年上杉輝虎 後前髪と云
北條氏康を代て小田原城
に迫り氏康固く城を守
りて出で戦ふ一日輝虎
鎌倉へ往き窪岡八幡宮へ
詣せしと紀忍城主成田長
康の不禮ありしを志ほり
扇を以て其面を搦けんと

長康怒憤りて遂に輝虎よ
疵きしが不関東の諸將ま
た多く長康ふ應ぜしゆゑ
輝虎兵を越後へ班せり
○九月上杉謙信武田信玄
と大に信州川中嶋に戦り
初め享祿十六年信濃の村
上義清信玄は攻破られ城
を棄て越後へ奔り謙信は
援けを乞ふ謙信之を肯
がひ乃ち八千騎を率りて
信濃より入り陣を西條
山よもゑたり信玄之を
聞て二万騎よて川中嶋に

虎の矢の譽れを
安げふが

のひらりひらり
永祿四

年の八月謙信
輝虎入

後の撃つて信濃入り
名也

西條山小標よりなりその

時信玄 晴信入道の

配は勢を分りて

とありし一平を山を攻

せし手は自將

皇月 長禄四年八月

至り雨宮の渡しを對して陣をとり、以て越軍の要路を絶ちたり。九月九日、信孝の山本勘介、晴行、道鬼と云と謀りて、兵を分ちて二軍とあり、一軍は西條山を攻め、一軍は自ら將となり、川中嶋よりひくとり、謙信の山上より敵軍の炊烟の立上るるを望み見、其兵を分て来り戦んとするを知り、乃ち諸將を下知し、宵に潜り犀川を渡り、信玄の本陣間近く進み、甲

河川中嶋を以て之を以て
 僅に其敵の陣屋
 上より電の烟をみ
 て敵のよきとて我
 計り知り謀を先ん

州勢を更よ之を知り、以て旭日昇りて雲霧晴ぬれば、大軍已小我目前あり、けきか大驚き、其處を謙信の軍陣をりつとて、押寄せたり、其鋒甚鋭、信玄の弟信繁を初め

夕より人を旗我
 尖り馬の塵を色
 雨宮の渡を截し
 信玄の本
 陣間からかく進



九月九日

三十七

山本道鬼初鹿野源五等こ
ふ討死せり、西軍入乱きて
戦ひたる時、緑衫を著、諸
白馬より乗り、太刀を提げ、
者直ちに進み来りて信玄
を斫る、信玄ハ太刀を抜よ
暇あらず、手より持し護扇を以
て之に接し、遂は二ヶ所の創
を被むれり、原大隅、信玄の
急あるを見て、槍よて進み
来り、敵を突く、槍ハ中
らざれども、馬驚逸せ、故
遂は物今れとあり、よける
後、之を聞え、彼の緑衫を

夢方よし志し、
き川、霧はる、絶間
より見つ、疑なく、あ、
備へ、副、
と、数、
武田

着ける者、即ち謙信あり、
一と、既よして、甲州勢の
西條山よ向ひ、一者返り、謙
信を夾み、撃て、大に越軍を
敗りたり、
○五年、長曾我部元親、土佐
ふ、掘りたり、
○六年、八月、三好義長、暴よ
病死せり、是松永久秀の毒
殺せり、あり、と、長慶ハ、十
河一存、弟あり、の子、義継と
以て、三好の家を、嗣、め、た
り、
○七年、八月、織田信長、美濃

信玄、胡床よ、
目、
せ、
と、
志、
馳、

小撃入りつれぬ、齋藤龍興城を棄て出奔、齋藤氏遂に信比たり、信長乃ち稻葉山に徙り居て名を岐阜と改めたり、

○八年此頃三好政康下野三好康長守岩成左道親助と三好三黨と称せり、松永久秀と其三黨と謀りて將軍義輝を廢し、義榮を立てんとせり、此時は義輝の謀を修覆して、その門牆は未だ完くらざる折あるを久秀の時失ふべからず

只三好と斫付終
兵修玄太刀を殺ま
有く。手。家。魔。扇
を。より。より。け。り。流
し。り。り。り。側

と五月、三好義継と彌一兵と起して急よ二城の弟をとり圍たり、弟中大に驚き馳ぎ義輝親ら出て之を防ぎ、近侍の諸士を既よ戦死せしむる火を縱つて義輝の遂よ自殺せり、義輝よ二弟あり、一人を覺慶とよひ、一人を周高とよひ、松永久秀周高を殺し、覺慶と幽たり、秋八月、細川藤孝後入道と稱せり、潛り覺慶を奉りて、近江に奔り髪を蓄へしめ、名を義

侍。づ。原。大。隅。主。人。の
危。急。を。救。え。ん。と。槍
と。て。突。き。中。に。ね。ど。
馬。に。發。り。飛。き。り。て。揚
り。れ。ま。そ。り。り。よ。け。る

○九月信長大兵を擧げ、西上せり。佐久間信盛、門下丹羽長秀、工門木下秀吉、藤吉、兼番、撃し進んで箕作、和山山の二城を陥し入る。決旬あつて、風を望み、已小潰えし者十八城あり。六角承禎も城を棄て、宵遁せぬ。是よ於て佐々木遂よ、込びたり。信長乃ち觀音寺の城に入りし。三好の三黨らるる懼れて、京都を棄て逃去たり。將軍義榮、いなほ頼田ふありし。ふたまた

病を病みて薨せり。廿三日、信長の義昭を、巳が軍中よ、迎へ兵五万を率ゐて京都へ攻入りし。諸寇賊と、お遁去り。岩成左道の、青竜寺の城を以て降参せり。○十月、信長兵を南方へ出し、池田の城を攻め、城主勝政降参し、三好長縁、政康、半遂、阿波へ奔れり。三好義継、松永久秀を初め、て摂津、河内の諸黨を、已小降参し、けき、信長兵を、班し、清水寺へ陣し、義昭

晴賢は我を釣し
はまし波の潮路我
をし船を寄つ
生現凡そ二軍を
騎敵萬を改了

ける元新者かぬ
謀りしと名おれ三
子餘人を改了
一島の糧を用意
せ暮るを待て了

將軍 義昭 信長の 軍中へ 來臨の圖



を本園寺に居らしめたり
天皇詔して義昭を征夷大
將軍と命じ信長を従五位
下彈正忠房任せり是よ於
て筒井順慶淺井長政等も
皆降参せり

○十二月武田信玄今川氏

真を攻め駿河を奪つり初
め氏真日夜遊宴ふ耽り
殆んど軍事を怠りけむを
信玄之を聞て兵を起し
駿河を襲ひ今川の諸
將多く信玄に降りけむを
氏真々遠江懸川の城に奔
り今川氏遂に亡び初
め氏真の北條氏康の女を
娶り氏康の子氏政へ信玄
の女を娶り此度信玄既
今川氏を滅せし北條氏
の之を督せんことを恐れ
人々々々氏真の罪を告げ

乘。皇。風。自。を。衝。く。
一。は。志。望。岸。より。そ。
船。も。を。之。て。必。死。
王。覺。悟。し。ら。本。
出。し。て。明。子。以後。短。

兵。急。に。攻。め。れ。を。晴。
賢。前。将。途。を。失。ひ。
逃。れ。た。船。も。あ。ら。ざ。れ。か。
命。を。乞。は。り。
足。及。尼。子。義。久。氏。

しめ、且つ富士川を界とし、駿河の地を分るんとす。諸氏政大よ之を怒り、其使者を殺せり。

○十二年春正月北條氏康今川氏真と納んじりて、駿河を伐り薩埵山に陣せり。信玄も中興津に陣し相持し、戦ふに四月に至りて信玄夜潜り甲州に還りし。

○三好氏の黨阿波より京に攻入り、將軍義昭を本國に討つ。三好義継獨

り將軍を助け、賊を撃つ。細川藤孝池田勝政荒木村重等も亦来り、之を援け、かゝる賊徒の遂に逃走せり。信長之を聞き、馳て京都に入り、二條の第を修し、義昭を移し居らしめり。

○五月信長木下秀吉とて京都を護衛せしめ、且つ皇宮を修理せしめり。○元龜元年信長朝倉義景を伐り、金崎の城を陥し入れぬ。浅井長政猝り、義景

冬、種々ありて攻降し。山陰山陽の諸國を併せ、十有餘大名とを有し、よるきて將軍義昭を赤松家の臣と

とす。信長も之を思ひ、二たむしを謀り、其の圖を以て信長も之を上洛し。

と通一兵を起し信長の
帰路を断し信長夜ふ
乗して密に引かへせり
六月信長浅井長政朝倉義
景と姉川に戦ふ大之
を破れり此戦ひは徳川家
康の兵朝倉義景に當り
甚く戦功あり

○九月信長三好の残黨を
摂津に攻め義景長政等
叡山の僧徒と謀を合せ信
長の帰路を断ち六角
兼禎ル之を應つけれ信
長大に懼れ將軍義昭

と共に京都に入りたり
○二年九月信長先叡山
の僧徒業浅井朝倉と心を
合せ巴れが帰路を遮り
しを怒り進んで叡山を攻
め火を縱り加藍を焼き
悉く僧徒を捕へ少長と
あひ皆これを斬り乃ち其
田を籍して明智光秀に予
へ坂本一城を築けしむ
○三年七月信長浅井長政
を討ち連戦をふ之を敗れ
り朝倉義景長政を援け
巴に大撞ふ至り八月

將軍義昭を執つ。
河内の玉へ徙たり。
是を於る是利氏。
代を應ふと十三世。
二百三十五年。

遂にたつと滅ぶ。
織田氏を是利氏
にからしむ。日
中務を帝を古復
奉王四方へ兵を出

○七月將軍義昭中へ信長を圖らんとし兵を以て榎嶋に據りむ信長之を聞てまゝ直ちに進んで二條の第を攻取らば兵を轉じて榎嶋を圍み將軍義昭を執へ之を河内の若江に放てり是は於て足利氏世をふるると十三世九ノ二百三十五年ふりて比び久織田信長足利氏小代りて諸政をとり行ひ村井貞勝とて京都の所司代とありむ

○八月義景兵三万を率ゐて長政を助け大撞丁山を圍り守りし信長之を攻落し勝り乗りて直ちを兼賀へ通りしを義景城を棄てて山へ奔りたり其山の守將朝倉景鏡 義景小畔を却て之を殺さんとしけむバ義景遂に自殺しぬ是は於て朝倉氏にびたり信長既は越前を平らげ羽柴秀吉とて小谷の城を圍みむ浅井長政遂にその妻織田氏及び三女子

○智とて勇とて力とて織田氏とおとすまゝ志とてあれとて上杉とて北條氏の業い各々國を争ひて互

兵と結本を書都を伺ふ間もるし夫と引織田氏を都近く少地を白てたがひをある敵をふ力多

を送り出して自殺せり是
み於て浅井氏山びたり信
長其田を分ち秀吉と興
へ二十万石を食ひ
是より先は六角承禎の子
義隆近江の鯉江の城に據
りて浅井氏に應ぜり信長
も柴田勝家をして之を
攻めし義隆城を棄て
遁去れり

○三年五月武田勝頼大舉
一々参河に出で長篠の城
を圍し徳川家康織田
信長共撃て大之を破
り勝頼塵う身を以て遁
れたる徳川氏と新田義重
より出たり初め鎮守府將
軍義家の子義國上野に
居りて新田足利の諸邑を
領し義重及び義康を生り
因り義重は新田を氏とし
義康は足利を氏とせり
義重の第四男を義季と云

よき武士多し
むはるや天下を覇
多し才のよき
しるべき地の理

時を得しゆき
里所ふるし織田信
長が中し四隣を征
せん柴田勝家の上
杉本龍川一益の條

徳川邑を領して徳川を
 氏とせり足利氏の世よ
 當りて新田氏の族を暴り
 索むること甚ど急あり徳
 川有親ある者二男子を挈
 へ上野祝入村に逃まじ
 其二子を又く自殺せ
 んとせしと記ふたむく相
 摸藤沢寺の僧尊親至りて
 皆已れの徒弟とは有親を
 徳阿彌と呼び長子を長阿
 弥と呼び少子を徳壽と呼
 び俱に携へて参河の大濱
 村に至り暫らく止りて

近村の妻松平氏酒井氏
 の女子あり二氏尊親に請
 て之を婿とありぬ乃ち徳
 壽ハ松平氏に養はれて泰
 親太郎左と名乗り長阿弥
 と酒井氏に養はれて親氏
 次郎と名乗る泰親の次
 三郎と名乗る信光と稱して岡
 守に居れり信光四世の孫
 清康より兵を用ひたり清
 康嘗て是より一字を手小
 握ると夢にたり僧横外あ
 る者之を解して是の字ハ
 日下人あり今公之を握る

不^ち之^ちを^ち向^ちて^ち中^ちに^ち
 羽^ひ柴^{さい}秀^{しゅう}吉^{きち}成^{なり}法^{はふ}
 毛^{もう}利^りを^を征^{せい}伐^{はつ}
 甘^{かん}多^たの^の兵^{へい}を^を控^{くわ}へ^へ播^は
 磨^まの^の法^{はふ}城^{じやう}を^を攻^{こう}め^め

磨^まの^の法^{はふ}城^{じやう}を^を攻^{こう}め^め
 妙^{ひめ}路^ろの^の城^{じやう}を^を築^{つく}ま^ま
 是^{こゝ}を^を根^ね城^{じやう}と^と固^{くわ}め^め
 是^{こゝ}に^に進^{しん}ん^んが^が支^し備^び
 亦^{また}高^{たか}松^{しょう}城^{じやう}を^を

皇明段名史略卷之五十一
 三十九

ハ公の子孫必む大い
興るそのあらんとし
清康の子廣忠刈谷の城主
水野忠政の女を娶り天文
十一年十二月二十六日一
男子を設け故事小因り
名を竹千代と呼べり是頃
織田信秀志願し参河を攻
川氏子乞ひ竹千代を以て
質とあさんとせり時六年
六歳あり駿河に送らる
途中あり織田氏に奪られ
後天文廿八年終に岡等

帰る今川氏に質り
弘治二年元服を加へ名を
元信三郎と改め後又元康
と改め藏人と称せり永祿
三年今川義元織田氏を攻
一と元康を以て大高城
に兵糧を送らせ且之を守
らむ義元遂に桶狭間は
討死せしより元康ハ今川
氏真に敵の兵を起せよ
と屢勸めけしども氏真を
舉されたる其懦弱なるを見
て元康遂に織田信長と和
睦し名を家康と改め氏を

攻むる。信長の中國
討手の後。信長と
初ふ。少里。本能寺。
志。陣所。急
け。頃。天正十

年の六月。百。能。と
か。明智光秀を
信長を。悔。怨。
申。急。あり。て。思。ひ。ひ。これ
し。も。ら。ふ。も。後。信

徳川は復たりたり、後参河遠江を併せ其勢より盛なり是歳五月武田勝頼長篠を攻め家康援を織田信長に請し信長五万騎を將りて設樂に陣せり時酒井忠次策を献じて夜



本能寺の夜討の圖

萬里を襲ひたれど甲軍之を頼りて驚動せし處を家康信長兵を縦て健闘し大ひ甲軍を敗り勝頼塵を身を以て逃れり武田氏の精兵多く此役討死せしむ

○四年四月北畠中納言具教已織田氏に屈られ遂に國を信雄に譲りて武田氏と結び信雄を除くんとしけさび信長遂に具教を殺しぬ是に於て北畠氏九

能先手を命せしむ。此期小ありと本意を天不知の時を今。桂川をさうら渡

了。よはふふと東を向やゆ。夜も明りたる。横雲ふ本能寺を。架園を闘をあげり。勢をさうらむ

智光秀羽柴秀長弟ありて之を攻め已ふ十餘城を陥入きたり光秀母の母を人質とあてて秀治を招き其至るを待て之を擒せしむる丹波の人を聞て大に怒り光秀の母を磔して殺したり
 ○八年初め秀吉播磨を伐入り三木の城を圍し一城主別所長治堅く守りて屈せぬ圍を受ること二年餘是に至りて餓て闘ふ事能はず遂に自殺せり秀吉進

んが但馬に入り竹田出石寺の城を攻め山名宗仙を降し因幡に入り山名豊邦を降し弟秀長は丸山の城を圍しめ自ら兵を率ゐて鳥取を圍むと數重鳥取急を毛利氏に告ぐを毛利輝元小早川隆景と師を率ゐる富田まで至りし鳥取あてに既小兵庫盡く城主吉川經宗丸山の城主と共に自殺して城遂に陥りたり
 ○信長の大坂の門徒と兵

ろんとす。まはる。毛利輝元の威を。清なる最中。小秀吉都の安を。包甲に敵を告ぐる。

我とわ終る。彼。輝元。和。

皇明長古大具卷之五上

と交へしこと已よ十一歳
あり是年天皇大坂に詔
て信長と和睦せしめし
僧光佐その家老下間刑部
等と謀りて遂に和を成し
子光壽とて城を致さ
めたり

○先は筑紫にて島津竜
造寺の二氏肥後を争ひ謀
奔闘戦せしうと決せし是
に至りて成さを行ふに鷹
背河を以て堺とあせり
○十年二月信長兵十二万を
率ゐて武田氏を伐ち信忠

先鋒とありて岐嶺よりう
ち入り信濃の敷城を陥し
のれ已は桔梗原に陣した
り徳川氏北條氏も兵を以
て来り會せり武田勝頼誼
訪より甲斐に帰りけるふ
諸將士多く離散しければ



武田勝頼
天目山にて
討死の圖

報をよみしに尼崎ま
と馳付て徳將よ
告げしに織田家の徳
將もいかに崎のま
はしひる秀吉を

光秀に戦書を贈り
日銭期し頃六
月十三日の夜に
のち山崎に西軍

近臣宿將屋々四十餘人と
天目山は櫓くしを、信忠滝
川左近をくしを攻め圍
む。勝頼事の逼れる哉
見、妻及び諸姫を殺し子
の信勝等と俱に鬪戦して
討死せり。武田氏はよ於
凶びより。

○五月秀吉兵を將めて備
中へ入り高松城を圍む。甲
部川を灌ぎて之を水攻め
せり。毛利輝元、吉川元春、小
早川隆景等大舉して之を
援へり。秀吉書を信長に呈

し援を乞ふ。曰く早く大
旗を出し玉をく。中國へ一
舉して舉ぐべし。信長喜
んば、池田信輝、明智光秀等
を先づ發せしめ、已む
信忠と繼ぎて出馬し、二十
九月京に入り、本能寺に
館せり。初め信長を殺し、
して將士を待こと無禮な
り。嘗て酒宴の席に光秀
の頭を撃てり。之を以て
鼓を代べし。光秀怒り
て常之を怨みし。是度
先は徳川穴山二氏の懸懸

ふせりと移く地の理
をまう利と陣を布
る。支將の目ぎは同
天王山はや秀吉
方よ攻めぬをいふを

軍の初を終日戦
ひ多そ。光秀
遂に敗るる。後
路を小栗栖の山を
狩り竹槍をす

信長 最上 早 隆景 之 五上

四十一

役を命ぜられし、信長は
た中國の先鋒を命ぜら
ば、光秀大に怒り、龜山に
りて明智左馬助、光春、齋藤
内藏助、利三等と謀りて、遂
に謀叛し、六月二日の味爽
に本能寺を攻め圍みたり。
寺の折し、人少く、信長
自ら起り奮闘し、矢代勝助、
金森長則、森蘭丸等を初め
百餘人しか討死し、信長火
を放ちて自殺せり。時、年
四十九、信忠も之を聞て亦
二條の城ありて自殺せり。年

二十六あり
○是頃、秀吉と高松城を水
攻めし、守將清水宗治、長左
自殺し、城も既に陥るぬ。
輝元等、はまき、信長の兵大
ひに至らんともを聞き、
秀吉と成らざるを行かめん
と、巴の盟の期日を約し、
けり。小、秀吉、本能寺の變を
聞き、毛利氏の使者を見、
京都の事變を演説し、且い
ふ若く成らんをあらわし、成さ
ざらん、又吾を撃んとせよ、今
日は若く成らん、汝歸りて徐

命を命ぜられし。信長は
吉多、信忠、信子、の秀
信を命ぜり、織田家の
繼せし事、小おられ
織田家の法將等

功績たう、秀吉を
いとも悪く、害せん。
謀りし、その成り、勢
を命ぜり、柴田、徳家
い賤嶽、小戦ひ、事

くみ之を討せし使者帰りてかくと報られを輝元喜んで秀吉を撃んとせしを小早川隆景切に諫めて秀吉と和睦せしむ輝元乃ち賞を出し旌旗三十羽銃五百と以て秀吉を授けしむ。

○秀吉と既し輝元と和睦し兵四万を將のせし馳て尼ヶ崎に至りこの頃織田信孝信澄丹羽長秀ら大坂に在りけるを秀吉人をも斯と大坂に教知

せしめしに信孝長秀等もた池田信輝細川忠興中川清秀等も共ニヶ崎に未會せり秀吉乃ち光秀と戦書と贈り十二日既し山崎に陣したる十三日昧爽光秀一万五千の兵を率るす山崎に來り一將を遣はして天王山に據らしめたり秀吉もまじ堀秀政堀尾吉晴等少の敵若し天王山に據らざる吾利ありとて天王山より戦ひ始まり

並ぶ神戶信孝も滅びしは其の餘の法將も秀吉を靡せしむる秀吉は大坂城を築きしむ四万を

呑ん執りけり其の血筋を除き絶さんと。あはれかてしむるくつ小畠信雄とて

建永元年六月二十一日



西軍鼓噪して合戦せしふ
光秀遂に敗走し青龍城に
走り夜を乗じて又十餘騎
と共に坂本に赴くんとて
圍を突て走りける途中
小栗栖村を過けると土
塊起りて竹槍を以て光秀を

刺し殺せり秀吉ハ兵を遣
て龜山の城を攻め光秀
の子光慶十兵を誅し
明智光春を安土に攻む
光春ハ馬よけ湖水を乗りさ
り坂本の城に入り光秀の
妻孥を手又し火を放ちて
自殺せり秀吉ハ信長の遺
骨を收め葬むり清洲に如
て柴田勝家丹羽長秀池田
信輝等と會議し信忠の子
秀信を奉じて主と爲し信
孝を以て之を輔けし江
田三十万石を秀信に供し

怒り移りて
是を教子に札を
遣退却はせり
秀吉河小出を
小牧山を待てて家

康心やけり
三月の中
たぬ人数を
小牧山陣を

其餘の地を諸臣分ちて之を領せり乃ち信雄を尾張ととり信孝を美濃勝家の江州の長濱長秀を滋賀高嶋信輝を摂州の大坂尼崎兵庫をとれり秀吉自ら兵力を以て但馬因幡及び伯備の數郡を定めゆゑ織田家の分地を受けず

○是より先朝廷秀吉の功を嘉し詔して従四位下を叙し右近衛中將に任ぜんとせし秀吉固辭して之を拜せず冬十月更に詔して從五位下を叙し左近衛少將に任ぜらる秀吉故の右府信長の遺骨を收めて之を大徳寺に改め葬むりし諸公子舊臣一人も至る者あつたれを秀吉自ら喪主とありて其儀をとり行はり詔して信長を從一位太政大臣を贈らせぬ

○織田信雄信孝を遺出ふし平素相善うらむ又柴田勝家も已れ宿將ありしを恃み常に秀吉を侮り疾をけるゆゑ信孝柴田佐

敵やをそしむと云ふ
多量秀吉の十二萬の
餘の人数をを也犬
少おし害のたす聲ん
とをそしむと聲ん

さきふの二氏と謀を通じ、信雄秀吉兩人を除くんとせし。ふ滝川一益、稻葉通朝らもまこと之に附り、さて信孝の美濃に歸り、勝家の越前へ歸り、間を伺ぐ、ついで同く事を舉んとせし。ふ其謀もれけき、秀吉、信雄と計り、北國雪深くして、勝家の出ることを能わざる中、疾く美濃を攻んとて、秀吉五万騎をかり、ふ岐阜を圍たり。ふ通朝等已に降参しければ、信孝も懼れて成

田信輝の岡崎の城。我勢少く、家康を。変せん、ん、張策を。たて、其勢凡三萬人。潜る、忍びて馳す。

かを求めたり、勝家の心も、まやまど、雪深くして、兵を出せざり、能はざれば、一計を設け、人を遣はし、秀吉と好むを修せんと請せたり、秀吉之を許して、後左右に謂て、いふ勝家、我を誑らう、春暖の時を待んとせざるなり、今我勝家の膽を寒ふせん、とて、十一月兵を率ゐて、長濱に至り、諭して勝家の假子、勝豊を降せり。

○十一年正月、秀吉七万五千の兵を以て、滝川一益を。○家康早くと是を。知る、俄に四子、其人。教を、さきより、時、越過。さび、追うけ、く、稲葉。長湫、を、敵軍、を、お。

長濱は代りその三城を陥
 りれたる、柴田勝家の秀吉
 を夾撃んとして、二月佐
 久間盛政をして、二万騎
 て木本陣せしむ、秀吉之
 を聞て馳て賤嶽に至り、十
 三隊の砦を築き固く之を
 守らしめ、長濱は帰れり、
 勝家已に大舉して柳瀬に
 陣たり、夏四月信孝ま
 乱を起し、勝家一益等
 應せしむ、秀吉兵を率
 て大垣に至り、信孝を攻
 んとし、佐久間盛政

とふまゝに之を
 小幡へを引上
 る所は海を抜
 有るより小牧山
 を陥れし秀吉

の兵五千を以て、不意中
 川清秀が守りし砦を攻め、
 清秀を撃し、勝家をりて
 之を、勝家志きり、小促
 して早く兵を收め、帰ら
 せむれども、盛政之を聴
 此時秀吉の岐阜を攻んと



吉を己が軍に破
 我より止齒が
 憤り、之を引上
 の人教く馳せ来
 了、是れを屍を野

四月、秀吉、長濱を攻め、勝家を破す。五月、大垣に至り、信孝を攻め、之を陥す。六月、岐阜を攻め、之を陥す。七月、清州に至り、勝家を破す。八月、京都に至り、秀吉を討つ。九月、長門に至り、勝家を破す。十月、大坂に至り、秀吉を討つ。十一月、長門に至り、勝家を破す。十二月、大坂に至り、秀吉を討つ。

しける頃ある小賤獄の報
知をき、刀を揮ひ喜び躍
りてり、圖らざりた吾今
大ある捷を得んとて、
乃ち歩騎五千を率る疾く
馳て日暮、柳瀬に至り、
盛政之を聞て驚き急、軍
を整へんとせし、羽柴勢
を以て攻寄たりけき、盛
政遂に大敗して逃走せり、
此時秀吉の近臣加藤清正
福嶋正則、加藤嘉明、平野長
泰、脇坂安治、片桐且元、糟谷
武則、等槍を揮つてよく戦

ふみりて敵を
明日は小幡を助め
敵さんと寄来と
えんを敵はや何
地はも是ありと

ひくを、世よ之を賤獄の
七本鎗と称せり、勝家の核
山近ありて、盛政の敗績
せし、我聞き軍中大に
驚き士卒多く逃散ける
を毛受莊介ある者、勝家の
微号を借り、自くら勝家か
り、名乗りて討死せし
ハ其間小勝家の辛くして
北莊は帰れり、秀吉又進ん
で北莊を攻め圍むれば、
勝家城は火を放ちて遂に
自殺しぬ、柴田氏は於て
はびたり、初め勝家の室

い。の。後。り。ふ。秀
吉。と。助。ん。生。れ。く
工。い。つ。ふ。樂。田。了
ふ。も。を。助。め。れ。地
川。羽。柴。の。直。氏。也。

皇朝御名史畧卷之五十一

五十一

織田氏を先よ淺井長政小
 嫁一三女を生り、淺井氏凶
 び一後三女を將りて柴田
 氏は醜せり、柴田氏凶ひて、
 秀吉その三女を索め得後
 其長女を納めて甚ど之
 を寵愛せり是淀君あり
 ○信雄ハ信孝を岐阜に圍
 一ハ信孝遂よ自殺一ハれ
 一益々遂よ秀吉ハ降参
 せり、
 ○十一月秀吉大ハ大坂ハ
 城けり諸大名ハ課して巨
 石大木を聚りハ役せり

美濃と尾張に前
 一ハ戦ハるハ一ハ津川
 氏多ク勝利を以
 一ハれハ天下の諸將
 一ハ徳川ハ一ハ心戦

所ハ十餘國あり殿宇の
 壯麗塹壘の完固ある天下
 第一と稱せり秀吉威望既
 隆あり一ハ漸ク織田
 氏を忌之之を除くんと一
 けまどハ我より端を啓
 んことを憚り信雄を以て
 一ハ發せ一ハめん一ハて一ハ令
 一ハて秀吉ハ貳心ある一ハ
 一ハ故さらハ一ハ流言せ一ハめけ
 一ハまハ信雄ハ心ハ憚ハる一ハ
 一ハくハ一ハあん

守りよハ一ハ秀吉ハ終
 一ハ一ハ思ハる
 信雄家ハ康チ人
 一ハ睦ハる一ハ兵ハ
 解キ南海小陸

○長曾我部元親東讃岐を
 伐之を平らげ悉ク南海

皇朝傳名史略卷之三十一

三十一

四國を併せ、その威遠近を振る

○十二年正月秀吉ハ信雄の執政四人を招き之ヲ暗に謀る小利を以てせし三人ハ秀吉ニ従ひ一人ハ之を信雄ニ告し之ヲ信雄大ニ怒りて秀吉と絶交し秀吉を討せんとなせり三月秀吉信雄を除んとて兵を率ゐて信雄を攻むる小信雄死して遂に援けを徳川家康小乞へり家康乃ち二万五千の兵を

志願す。雲井を凌ぎ飛ぶ。羽成。以本ひ。帝。生功を愛さ。位系

率ゐ進んで小牧山を取り信雄を勢へて故陣をたふ又城を小幡に築きて以て参河への往來を便せり秀吉兵十二万五千人を率ゐて犬山に陣し小牧山の前に濠を二重に掘り柵を植て固く之を守りて對陣せり四月五日池田信輝秀吉小説てり今敵の精兵盡く此に集れり思ふに岡崎に定めし空虚ありん我一軍を以て潛し敵の背に出で参河を襲ひ因り家

叙せられ。關白。進。免。姓。を。豊。吉。を。賜。り。け。る。後。陽。成。帝。孫。中。時。吉。太。政。大。臣

康を夾み撃んとて、兵三万を將りて密に参河へ馳せ向つり家康へ斯るよりを覗ひ知ら自ら四千人を率り、信輝の後より疾く追々けり、稍葉ふ至りし時、敵の後軍を撃破り、尋ひて長秋に至り、大い之を撃敗り、信輝、長可、秀政等、斬り、乃ち兵を收めて小幡の城へ引入、即夜陰く小幡山へ歸れり、秀吉へ長秋の敗聞をきき、大に怒り、自ら數万騎を率りて馳

て長秋に至り、小幡の城を圍ふ、小幡は入り、且日、小幡を攻ける、敵一人も之をまきを見て、秀吉、慨然として、家康へ何の神あるやとて、徒ら兵を引、樂田へ歸り、五月朔日、兵を留めて、遂に西へ歸れり、より、家康も又清洲に入り、信雄も又長嶋へ歸れり、その後羽柴氏の兵、徳川氏の兵と戦ふ、半歳あり、徳川氏常勝ありとぞ。

とあり、天下の改下
 して、生る事よ、出で
 とそ、あまき、秀吉の、そ
 九海を、伐んとて、頃
 冬、天正十五年、十五

万の勢を、とて、水陸
 法、も、とら、向ひ、竹
 と、破るの、勢を、大隅
 薩摩を、攻、鹿嶋
 鹿嶋城下、押寄

徳川家康
長洲
羽柴勢を
打敗る圖



○十一月秀吉人を以て罪
を信雄に謝し和議を請
ひしに、信雄喜んず之を
許せり、秀吉又人を以て家
康と和を乞ふに、家康之
を肯んせざれども、信雄も
亦自ら來りて切に和議

を勧めけり、家康遂に秀
吉と和睦しぬ、秀吉乃ち家
康の庶長子と養子とな
し、羽柴秀康と名乗し、
○十三年春二月秀吉正二
位内大臣に遷れり、秀吉
と寒微より起りてその姓
族許らざるを因りて自ら
平氏を冒せしふ是に至り
て更に改め、藤原氏を冒
せり、
○秀吉紀伊を攻め、根來寺
雜賀等の賊を滅せし、五月
弟秀次を以て長曾我部元

○ちう
たり力起す。此
津義久削髮染衣
の姿とす。以て
れも降参しぬ。
又同し十八年

二十五万の勢を従く。
箱根の嶮を恃む。
小條氏残るを滅
ぼし、帷夷を以る。
む勢に奥羽を居る

親を伐りて之を降し其
三國を削る、四國盡く平ら
げり

○七月秀吉征夷大將軍と
あらんと欲せられたる故事
み征夷の任は是を成る
源氏に係れり、此時足利義
昭京都に寓居せるを以て、
秀吉人を以て其假子とな
らんことを求めし、義昭
は秀吉を賤んどて之を許
さざりし、内大臣藤原晴季
菊亭 秀吉小説て關白とな
るべきことを勧め、此時の

關白藤原昭實を調して職
を免せしめ、秀吉自ら請て
關白となれり、詔りて姓
を豊臣と賜ふる

○秀吉越中を伐ち富山城
を逼りし、小佐成政降参
せり、秀吉遂に越後に入り
左右數十騎を従へし、絲魚
を抵り上杉景勝と會盟せ
り

○十四年九州の大友宗麟
島津義久が日く小巳れよ
逼るを以て、秀吉は降を乞
ひ且援けを求めたり、又高

了法大名伴達佐
作の少将を、生威了
おもしろく、後多望。
海内を、下す、死
け、威風凛々

た、異部を、征、秀吉、不
秀次、白、穢、讓
自ら、大、閣、堂
稱、犯、前、の、名

橋宗茂立花道雪等もこの急を告て秀吉に援を乞ひたるゆゑ九月秀吉書を島津義久に遣してその朝貢を徴したる小義久其書を投て秀吉を慢罵せり

○後陽成天皇 神諱ハ周仁正親帝の皇孫誠仁親王の御子あり慶長十六年よ位を傳へ後水尾帝の元和三年八月廿六日崩御玉ふ御壽四十七

○十一月關白秀吉太政大臣に任ぜりれ從一位に叙

古く天下の諸將を
召し先朝鮮を伐
んとし以て文祿元
年三月浮田秀家

○是歲秀吉東山より方廣寺を建て大佛を塑造せり半身の高さ十六丈あり巨石大木と聚り課する所二十國あり

○天正十五年秀吉は去年より畿内南海北陸山陰山陽東海の諸道三十七國兵九を十五万を催促し今春二月水陸共に進み豊後小至り兵を分ちて兩筑前肥を攻下し五月五日秀吉已に千代川陣せり大

を將し加藤小
西を先軍とし其勢
んを平す方水軍陸
軍としりし日本
心のつららるる山

開薩摩の諸城多く降参し、大兵進んで魔嶋は通り、かゝ義久大に懼れ髪首緇服して、遂に軍門に降参り、秀吉乃ち義久の弟義弘を立世を嗣しめ、七月振旅して京に歸れり。

○十六年四月天皇曹臣氏の聚樂第に臨幸し玉つり

○十八年二月秀吉兵二十五万を以て水陸並び下りて小田原を攻めり、秀吉初め書を以て北條氏政に其入觀を諭せしに、氏政之を

多岐折を、朝鮮
し、母より出野祭。
小西行長を彼
地の中を志つるつるが。
加藤清正を告げさせ

答へむ、又伊達政宗に諭せども、政宗又これを肯せむ、是に於て四月兵を進めて、山中箱根の諸城を陥し、生牙城を石垣山にたく、遂に小田原城を圍むたり、一日秀吉城樓に登り家康



秀吉城樓より上りて關東を瞻望する圖

む。さきかたに、金山に
港よ、善心ま慶尚道
より進軍あり、
霞をゆく如く直り
國都に逼りけり。

是謂て曰く關東八州已よ
 我目中に在り不日よ取て
 以て卿よ與へんのと抑卿
 亦小田原よ居る乎と家康
 對ての然りと秀吉の
 不可あり我嘗て地圖を閱
 せし此より東二十里不
 どおて江戸とゆる地あり
 形勢甚だ便宜あり卿宜く
 之よ居るべしと既ふして
 上杉前田等兵を率ゐて上
 野よ攻入り諸軍一月よ六
 十餘城を攻落し威風遠近
 振ひしを與羽の諸大

於解法の老志ふる古
 神功皇后新
 羅を伐せ給ひしを
 了たえく久しき年
 月かきし事にあ

名もこゝろ来りて降参せり
 六月伊達政宗も亦来り降
 れり七月氏政氏直遂に降
 参せり氏規の葦山を固く
 守りし小田原已下り
 一と聞て亦降参せり秀吉
 の氏政を殺し氏直氏規ら
 を高野よ放ち關東こゝろ
 く平らぎて九月京都よ歸
 れり
 ○十九年十二月秀吉その
 弟秀次を關白とあし自ら
 太閤と稱せり是より先よ
 秀吉使者を朝鮮よ遣り

んとを現よ多し
 夢よと志と急
 る海岸防衛示す
 起毛中より破まきそめ
 羊の席よあふく

皇朝備前名史略卷之五十一

我師を導きて明を攻めり
んとせし朝鮮王李昭答
へも又宗茂智を以て之を
責しめしに李昭又之を肯
んざん是よ於て秀吉大よ
諸侯を會し朝鮮及び明を
征せんことを議せり

○文禄元年春二月天皇再
び秀吉の聚樂第に幸しむ
以遊宴數日ふし還幸し
たまへり

○松前の豪族崎慶廣部
少輔と稱し又志摩使際を
守り伊豆守と稱し使際を
を修し降を乞ふ秀吉之

を大名の列せしむ蓋し慶
廣の先々若狹の源氏あり
父秀廣乱を避て海島に
來り智力を以て松前を取
り或ハりの嘉吉年中若
狹守源信廣の者ありし
海を越てその南界北地を
取り定め因り松前を以て
自ら氏とせりと

○文禄元年春三月大關秀
吉肥前の名古屋に陣營を
を設け浮田秀家を大將と
し加藤清正小西行長と先
鋒とあり其勢九万十五万

防力之あざりぬ。
韓王李昭を狼狽
慣都を悔し
平壤より出奔
言は又義我ありぬ

清正威鏡道
進文了韓の三
子を生擄てその不
途んを元良吟の
境より復りぬ又

人水陸九軍とあり四月十三日進んで金山の浦に達せり行長の素よりその海路を知りはまふ衆は告を以て先を發して金山に着し城主鄭撥を生擒し兵を分ちて慶尚道を徇へ東萊梁山等を陥りれ鶴院に至り勝を乘て進んで國都を逼りしを國王李熙其世子と與ひ平壤に出奔せり浮田秀家乃ち國都に入りて之を保てり夏五月韓將の李光尹國馨等五万余の

水軍の方相不務嘉
明帝詔坂安治壽
韓の海軍李熙
平巨濟洋義ひ
く軍と勝負のわが

の兵を以り來り接ひしを我兵之を逆へ撃て之を破りしを韓王李熙又義州を奔れり行長遂に平壤を拔取たり清正は行長は後三日行長の既に進んで聞て大に怒り路を換て咸鏡道より進み入り韓克誠を生擒ふし韓の二王子及び大臣黃赫金等を拘へあは北方の深く進み入り隣國元良哈に至り一城を拔取て歸りたる途海濱に出で遙く南西の高

王の韓王の國の
頻りに使を馳
る明帝の急を告る
援を請ふ明帝
祖謀訓を將し

山のありーを見て曰く是
 日本の富士山ありと又水
 軍の將加藤嘉明脇坂安治
 等の韓將李舜臣と巨濟洋
 一戰以來嶋康親之ふ討死
 せり韓王も先は連り急
 を明に告て援兵を乞ひり
 秋七月明主朱翊鉤その
 將祖承訓史儒筭等をして
 韓を援へめしふ行長之
 を逆へ撃て儒筭を殺し兼
 訓を走らせたり
 ○二年是より先は明の大
 司馬石星ある者越人沈惟

援け軍のさび
 存く只一戰は敗はる
 又李如松を將と
 してその勢は四方を
 雲雨の如く競いぬ

敵を薦め游擊將軍とし
 多く金帛を資りて行
 長より和を乞ひむ
 行長乃ち數多所を徵せり
 小惟敬とこれを許諾し
 て去りぬ明主翊鉤の成不
 成の信を乞ひらざるを計す



○あか
 事は又もあらむに日本
 刀軍を衆衆寡寡し
 小早川
 陰系ははらるに三方の
 冬もとも碧蹄館

り、又其將李如松を
 韓を援えしめたり、行長
 の和議の事より、備
 へ心く怠り、時急
 如松は襲をれ、遂に敗走
 一平壤を棄て、國都を奔
 居、此頃小早川隆景、開
 城を守り、李如松勝
 不棄て攻来りしを、隆景
 塵う三千の兵あり、碧蹄館
 一戦あり、大にこれを敗り、
 如松も辛く、逃去たり、
 ○清正も諸將と兵を合
 せ、晋州を攻落し、六万余人

去る。○おれい、これ
 去る。破り。李如松
 去る。辛く。逃去り。
 城を破る。李如松
 去る。辛く。逃去り。
 此頃、明帝、子よりよ

を塵よせり、故に韓人最も
 清政を畏れて、鬼上官と称
 せりとぞ。

○夏四月、明主を謝用梓、沈
 一貫、沈惟敬等を、行長
 と與に名古屋に到り、秀吉
 一謁せしむ、惟敬、行長を賂
 ふく、曰く、大閣韓の倭を
 歸し、慶尚、全羅、忠清の
 三道を割て、王とあり、と
 一行長乃ち秀吉に、報ト
 くの、明人、殿下を尊んで
 皇帝とあると云へり、と
 秀吉より、和議を許し、

王。撃。手。將。軍。沈。惟
 敬。を。小。早。川。行。長。と。多
 少。を。乞。せ。り。好。長。
 性。敬。と。多。少。を。乞。せ。り。

韓の二王子及び大臣以下を放ち還らむ

○秋八月秀吉の妾浅井氏秀頼を生し、秀吉大に喜んで大坂に還れり

○四年關白秀次瀧尾日守に甚しく人を殺して戦ふをよみ至れり故に世の人これを呼んで殺生關白といふはどあれも秀吉奏し請ふて廢して庶人といひ之を高野に放ち尋く死を賜ふ

○慶長九年秋九月秀吉見

服して明韓の使者を見て僧承克をして冊書を読むむ書中一爾を封じて日本王と為さんとありけるを聴く大に怒り立ちどろり冕服を脱ぎて冊書を裂て曰く吾已に日本を掌握せり王ならんと欲せば王たり何ぞ鬚鬚の封を持んと即夜に明韓の使者を逐還し遂に又西南四道の兵十四万人を徴し再び西征を命じ行長をして功を立てその罪を償へむ

よ後河志る言
知るその成る我
勸むれを太閤を
やと和睦をゆるさ
もて我に事し不

そのひを冊書の
辞に傲りよるを
く怒りをせし
盟血破きし生けそ
軟るべき血名を

○二年春小早川秀秋を大將とし、毛利秀元、浮田秀家を副將とし、黒田孝高を参謀とし、再び進んで釜山を保てり。秋八月、行長韓の水軍の將元鈞を襲ひ撃てこれを斬り、進んで南海、順天を陥り、清平を機張より慶州、全羅へ攻入り、諸城を潰え、遂に行長と兵を合せて黄石城を攻落せり。鳥津義弘、加藤嘉明等、八韓將楊元を撃走し、

進んで全州に入り、明將陳愚衷等を走らせたり。
 ○十月、天次第小寒、清平を軍一がこけ、清平を退し、蔚山を守り、行長を退き、順天を守り、諸將軍營を連ね、釜山と聲援

何れぬ血潮を
 流せしむるも
 ても我りしを
 けい ちやう ねん よ ぐらう
 孝文 三年 二月 終
 以 小早川 秀秋 至



加藤清正蔚山釜城の圖

好むる一十四万餘
 の人殺しを再び朝
 鮮へ向せしむる切長
 釜山より情心の機
 張よりそ攻より風

をなせり、十二月明の諸將
 ら議して、今日本の將
 清正最も勇悍あり、先づ清
 正を克む、餘ハ風は従ふ
 て解んとて、明の三十三將
 韓の七將共々兵數十万人
 を率ふる、今蔚山を攻
 来れり、清正此時機張りあ
 りて蔚山の急あるを聞き、
 敵軍を衝て馳て蔚山へ
 入りぬ、敵の城を囲むこと
 十昼夜、吾兵乏食、乏
 飢渴甚し、馬を
 刺て其血を飲み、紙を噛み

殊木葉を吹く。
 水の低き流る如く。
 勢猛く入り。
 己の國都を逼る。
 以て塞を穿て、向ひ

壁土を煎てこれを食せり
 に至り
 ○三年正月小早川秀秋蔚
 山の急あるを聞き、諸將と
 五万騎を率めて来り、接
 へて、清正等又陣を演
 して共々明軍を追撃て
 大にこれを破き、夏四
 月秀吉征韓の諸將中秀
 秋、清正、行長、義助、長政等
 十餘將を留めて其餘ハと
 悉く罷歸らむ、五月
 秀吉疾あり、七月疾と
 重り、八月十三日御年六

行長を順天
 を守り、清正の蔚山を
 ちり、れと志ん人
 馬を休め、るを、茲小
 明輝の徳を、奉る。

皇明受命...

六十一

十三ふく薨ぜり
○朝鮮に留まり一十餘
將等々各分れく四所ふ
純守せり秀秋を金山を
守り其右を蔚山を清
正之を守り其左を順天
あり行長之を守り泗川
を其前在て義弘之を
守り四城の兵九を十萬
あり明軍の大將董一元
の義弘に當り劉綎を行
長に當り麻貴清正に當
り陣隣の水軍を以て其
後に在り其兵亦十萬相

互に對峙して未だ戰ふ
さく秀吉終りに臨む
時淺野彈正石田三成に命
じりし汝朝鮮に赴きて
我兵を收めよ若し之を收
むること能えされば家康
利家の中一人を遣えん
させられた縱令百萬の敵あ
りといふども我兵の尾を
躡むこと能えし將に目
を鑿せんといふ又目を張り
て曰く我十萬の兵を以て
海外の鬼とあらむむるこ
と勿れと言畢りて薨ぬ

獨に法正を討
徳手の軍を自
敗せんとの氣
よき清正を自
了は蔚山を以て
まけし法正を討
圍れと程書て馬
を寄し紙を
を箇ける所
少きれ少

まけし法正を討
圍れと程書て馬
を寄し紙を
を箇ける所
少きれ少

○九月三日家康諸侯を會して共に嗣子秀頼を討つべしと盟ひ遂にあつらんことを盟ひ遂に浅野石田とて肥前を赴きて征韓の諸將を召さむとて彼地よ於ては行長の劉綎を撃ち清正の麻貴を撃ち義弘忠恒義弘の子を撃ち董一元某國器等を迎へ撃て之を走らめ首を斬ること三万余級明軍遂に大に敗走せり征韓の諸將等秀吉の討つを聞いて稍驚く小歸郷の装ひを

治めし明軍あてり之を探り知り其君臣喜んで相賀し乃ち刑珍を將として我軍を蹕しむ此時我邦の訛言あり明兵將は大舉して我兵の帰路を扼せんとする由を聞て家康利家とて親ら彼地を往んとするを諸將衆議して藤堂高虎をして往し高虎已に肥前に至りたるを義弘新塞の捷報ありゆゑ彼地を渡すことを止たり此頃金山の兵ハ巴は秀秋

大申む事なき。後誥の兵を待たず。遂に明軍を破るるに如き事。けごの事なれど。

明韓は人々を以て清正を怖むる鬼。上官を呼ぶ。年秋八月前。慶長三年。

小従て對馬に還り、次に清正義弘も亦兵を收めて還れり、行長も亦還らんとし、なる時劉純又急に来りて、之を圍むけり、清正義弘共返り戦ひ、行長を援けて舟に乗らむ陣陣、鄧子龍、李舜臣等、兵艦數千艘を以て、之を洋中要たり、義弘も且闘ひ且却て加徳嶋に至り、けき、兵四方に集りて、行長を圍撃たり、行長一嶋は上り、敵塞を奪て之は擺れり、

夜遁れて義弘も歸し、義弘等と又戦て、明軍を撃却し、遂に之を對馬に還せり、
○十一月諸將軍を整へ、肥前名古屋に還り、これを、兩奉行これを迎へ、秀吉の遺命を宣し、諸將等相率り、伏見に詣り、秀吉を謁せり、五大老等之を慰勞し、各を以て、各を以て、各を以て、且國家多難あり、を以て、明年を境にして國を歸れり、

豊臣秀吉伏見の城に豊死後、朝鮮を伐し、徳將等力たふく、あは、七十年の辛勞も只

以て、水の泡起
えり、入るん、心
く、塔をとり、小
ま、子。

